2019.12.31

日本心理学会国際賞

小嶋祥三

日本心理学会で、国際委員会担当の常務理事をしている時に、日本心理学会の国際賞を創設した。それまで、心理学会の賞は*心理学研究*と *Japanese Psychological Research, JPR* の優秀論文賞だけだったと記憶している。国際賞を設けることにより、若手研究者の国際学会での参加、発表や国際的な雑誌への論文の発表を後押ししたい思っていた（国際学会には参加費用を補助する制度を別に設けた）。*心理学研究*の論文は日本語で書かれ、たとえ内容が素晴らしくても、外国の人が読む機会はまずない。*JPR* は英文だが impact factor, IF が非常に低いので、読まれる機会が少ない（誤解しないでほしいが、わたしはこれらの雑誌の論文のレベルが低いとは思っていない）。わたしが学生の頃は論文を英語で書いたり、外国の雑誌に投稿したりするという気持すらなかった。もうそのような時代ではない、このような雰囲気を打破しないといけないと思っていた（この点をわたしは二木宏明先生から学んだ）。

国際賞には特別賞、功労賞、奨励賞を設けた。特別賞は海外でも広く活躍され、特段に優れた国際的な業績を上げた方で、*Psychological Review* や *Psychological Bulletin*、handbook などに総説を書かれた方を念頭に置いた。功労賞は日本で行われる国際学会の開催に尽力された方を対象とした。奨励賞は世界的に広く読まれている雑誌に論文を数多く発表した若手研究者を対象とした（かれらには日本で行われるであろう国際学会で活躍することを期待した）。したがって、敢えて IF や論文の引用度数を参考にした。これらの指標が研究領域によって大きく異なるのは承知の上だった。とにかく、最初なので、今後の参考になるような授賞を目指した。そのため、エライ人から推薦された方を対象外にして、少し波風が立った。その種の心配があったので、特別賞は国際委員会推薦とした（授賞の方針を貫徹したかったのだ。現在は規程が改訂されていると思う）。

しかし、この賞の将来を楽観していたわけではない。いずれ、上のものが自分の下にいる若手にハクをつけるのに利用したり、下のものが上のものを忖度して推薦したりすることも起こるだろうと予測していた。現状がそうなっていないことを祈るのみである。